

令和6年度病害虫発生予察特殊報第2号

令和6年9月9日
愛知県

1 病害虫名：トマトキバガ *Tuta absoluta* (Meyrick)

2 作物名：トマト

3 本県における発生確認の経過

令和6年9月3日に、県内のトマト施設ほ場内において、表面のみを残した薄皮状の被害葉及びせん孔侵入した食害痕のある被害果実が確認された。食害部には、トマトキバガと疑われる幼虫が確認された。また、同日にフェロモントラップをほ場外に設置したところ、翌日（9月4日）に成虫が誘殺された。農業総合試験場環境基盤研究部病害虫防除室で同定を行った結果、トマトキバガであることを確認した。県内での農作物への被害は初確認である。

本虫は、令和5年10月10日にフェロモントラップ調査に初誘殺（名古屋植物防疫所同定）が確認され、病害虫発生予察特殊報（令和5年10月23日付け）を発表している。今年度は4月24日に初誘殺が確認されて以降、複数地点で誘殺が続いていた。

4 全国における確認状況

本虫は、令和3年11月に初めて熊本県で特殊報が発表された後、沖縄県から北海道までの計42道府県で誘殺又は食害が確認されている（令和6年9月9日現在）。

5 本種の形態及び生態

(1) 形態

成虫（写真1）は、翅を閉じた静止時で体長5～7mm（前翅長約5mm、開張約10mm）である。前翅は灰褐色の地色に黒色斑が散在し、後翅は一様に淡黒褐色である。幼虫（写真2）は、終齢で約8mmとなる。体色は淡緑色～淡赤白色で、頭部は淡褐色である。前胸の背面後方に細い黒色横帯がある。

(2) 生態

1年に複数の世代が発生し、繁殖力が高い。発生世代数は環境条件によって異なり、年に10～12世代発生する地域もある。卵～成虫になるまでの期間は24～38日程度だが、気温が低い時期はさらに延びる。成虫は夜行性で、日中は葉の間に隠れていることが多い。卵は、寄主植物の葉の裏面などに産み付けられる。幼虫は1齢から4齢までの生育ステージがあり、土中や葉の表面で蛹化する。

(3) 被害

ナス科植物が主要な寄主植物であるが、マメ科であるインゲンマメも寄主植物として確認されている。トマトでは、茎葉の内部に幼虫が潜り込んで食害し、孔道が形成される。葉の食害部分は表面のみ残して薄皮状になり、白～褐変した外観となる（写真3）。ハモグリバエ類では線的な食害痕となるのに対し、トマトキバガでは面的な食害痕となる。果実では、幼虫がせん孔侵入して内部組織を食害するため、果実表面に直径数mm程度の穴が空いて腐敗する（写真4）。

6 防除対策

- (1) 被害の特徴を把握し、ほ場内をよく見回り早期発見に努め、見つけ次第捕殺する。
- (2) ほ場で発生が認められた場合は、発生を拡大させないため、薬剤散布を行う（表）。薬剤散布にあたっては、最新の農薬登録情報を確認し、薬剤抵抗性の発達を防ぐため系統（IRACコード）が異なる薬剤でローテーション散布を行う。
- (3) 収穫残渣、被害葉及び被害果実をほ場や露地に放置した場合、本虫が増殖する恐れがある。速やかに土中に深く埋却するか、ビニール袋で一定期間密閉し、寄生した成幼虫を全て死滅させたいうで、適切に処分する。
- (4) 作終了時は、一定期間施設を密閉し、本虫を死滅させた後、残渣を運び出す。
- (5) 施設栽培で防虫ネット未設置の場合は、コナジラミ類対策も兼ねてハウスの開口部に0.4mm目合いの防虫ネットを設置する。ネット等の破れやすき間は補修し、本虫の施設内侵入を防ぐ。

トマトキバガの発生が疑われた場合は下記の連絡先までお知らせください。

7 連絡先

農業総合試験場環境基盤研究部病害虫防除室
電話 0561-41-9513



写真1 トマトキバガ成虫
(農林水産省植物防疫所原図)



写真2 トマトキバガ幼虫



写真3 トマトキバガによる葉の食痕

写真4 トマトキバガによる果実被害

表 トマトキバガに登録のある農薬（抜粋） 令和6年9月9日現在

薬剤名	希釈倍率 または使用量	使用時期	使用回数	適用作物		IRAC コード
				トマト	ミニトマト	
ベリマークSC	薬量 400株当り25ml（灌注） （希釈水量 400株当り10～20L）	育苗期後半～定植当日	1回	○	○	28
プリロッソ粒剤	2g/株（株元散布）	育苗期後半～定植時	1回	○	○	
プリロッソ粒剤オメガ	2g/株（株元散布）	育苗期後半～定植時	1回	○	○	
ディアナSC	2,500～5,000倍	収穫前日まで	2回以内	○	○	5
ラディアントSC	2,500～5,000倍	収穫前日まで	2回以内	○	○	
ダブルシューターSE	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	○	○	-, 5
アグリメック	500～1,000倍	収穫前日まで	3回以内	○		
アフーム乳剤	2,000倍	収穫前日まで	5回以内	○	○	6
エスマルクDF	1,000倍	発生初期 但し、収穫前日まで	-	○	○	
コテツフロアブル	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	○	○	13
トルネードエースDF	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	○		22A
アクセルフロアブル	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	○	○	22B
フェニックス顆粒水和剤	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	○	○	
ベネピアOD	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	○	○	28
ヨーバルフロアブル	2,500倍	収穫前日まで	3回以内	○	○	
グレーシア乳剤	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	○	○	30
プレオフロアブル	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	○	○	UN

成分ごとの総使用回数に注意する。IRAC コードは殺虫剤の作用機構による分類を示す。

IRAC コードの詳細は、https://www.jcpa.or.jp/assets/file/labo/mechanism/mechanism_irac03.pdf を参照する。薬剤の使用に当たっては、ラベルの表示事項を守るとともに、他の作物や周辺環境への飛散防止に努める。